

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	赤い花 : 論説
Author(s)	眞菰生
Citation	龍南會雜誌, 158: 54-67
Issue date	1915-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6496
Right	

くを得可らず候へ共、窓前の青葉若葉は生々として自然の元氣を明示し、孤燈の許遙かに白川の瀬の音を聞きつゝ筆を擱かんと欲すれば、其の昔無邪氣なりし交遊を偲び、往事の回想に多少の感慨を禁する能はず候。幸に小生の微意を顧み永心の跡を感銘し給はゞ、小生の喜悅之れに過ぐるもの無之候。教あり類なし。兄の努力は兄の爲めのみならず、父母の爲め一家の爲めにして來る可き幸福は期して俟つ可きものと愚考致し居り候。妄言多罪。

(大正四年五月十五日夜稿)

赤い花

眞 菰 生

大正三年九月十二日の日記に次の如く記されてある。

高山の頂に赤い花が咲いて居る。世の中にはまだこの赤い花を望むことの出来ぬ僻れた人達がある。赤い花を遙に眺め乍ら勞を惜しむ人達もある。赤い花を取らんぞあせり乍ら徒らに薔の荆棘に惱まされて居る人もある。赤い花を求めて中腹まで上つた人もある。赤い花の下で倒れた人も少くない。然し千九百年前にこの花のために倒れる人の多いのを見兼ねて路を拓いてくれた人がある。然し其路は非常に狭くて見出し難い。

自分は三年の間この赤い花を求めて今漸く其狭い道を發見したものである。其求めた經路をここに記することは全く無益なことでもないと思ふ。

一、赤い花の見なかつた時代。

“Aus dem Leben heraus sind der Wege zwei dir geöffnet, Zum Ideale führt einer, der andern zum Jod”

理想に生きた自分は幸福であつた。然しソクラテスの “Er esse und trinke, um zu leben und zu lernen” は自分には満足されなかつた。自分は書き改めた。

“Ich esse und trinke, um zu leben und zu tun.” 自分は今かく書き記す時にファウストの句を思ふ。

“Geschrieben steht! Im Anfang war das Wort!,” Ich kann das Wort so doch unmöglich schätzen.....
Geschrieben steht : Im Anfang war der Sinn! Ist es der Sinn, der alles wirkt und schafft? Es soll stehn; Im Anfang war Kraft! Im Anfang war das Tat!”

ファウストの思索の経過は實に彼のみのものではなかつた。「始に道あり道は神と共にあり道は神なり。」と叫んだヨハネの信仰はファウストと共に自分には未だ理解し難き處であつた。

儒教一點張の道德によりて育てられた自分には時の社會が盛んに叫んだ「自我の覺醒」「自我の徹底」は只自分の反抗心を挑發するのみであつた。自分はこんなことを考へた。

人間は社會の一員である如く如何しても祖先子孫の連鎖であらねばならぬ。こゝに一の圓壻あり。直徑は一定の長さを有するか高さは無限である。其一部分を切斷する。其切斷面に我等現代人は住んで居る。其切斷面を構成する一分子は「我」である。圓壻は「我」の集合が形成するものである。然し圓壻ありて始めて「我」なる分子がある。既に圓壻あり。「我」は其分子であらねばならぬ。各分子たる「我」各個の關係は平等的であるけれども圓壻と其分子たる「我」との關係は從屬的である。これが即人類と個人との關係である。

自分は「我」は「我」に非ずして人類流轉の一つの現象である眞に人生の貴重なる所以が存在することを説かんとしたのである。故に人類の理想、人類の行方は最も大切な問題となる。これ等は「我」よりも大な

る價值を有するものとなつた。眞理の探求はこゝに問題とせらるゝに至つたがこれは「我」が爲すべき行爲の標準の必要に促されたるに過ぎない。そして「我」は遂に人類の爲めに幸福を創造する——其爲めには自己の犠牲をも喜んで爲すと云ふ結論に到達した。自分は人生の目的をさへ事實そのもの——事業によりて得らるべき果實に非ずして果實を成熟せしむべき化育そのものに求めたのである。此の化育の前には「我」は最も安價なるものとなつた。個人主義は自分には敵となつた。

然し今、回想する時これは自分には最も喜ばしきものである。何となれば自分の思索の方法は自分をして容易に宇宙の鍵を握らしめたからである。「我」が無極の圓囀の一分子に過ぎぬことを感じた自分は容易に「我」の外に良心を發見することが出来た。思索は次の如く進んだ。

吾々が悪いことをした時に「これは悪いことをした」と思はすところのものを名づけて「良心」と云ふ。然るに同時に吾々は良心の外に自然的法則を感じる。善惡は具体的には明瞭に分たるべきものでないが然も我々は明確にこれを識別する。良心は「我」の内心に存し、自然的法則は「我」の外より感ずる。然し一つの事について同時にこの内外兩者より壓迫を感じる所以は畢竟この兩者が同一の根據に出るものであるからであると思ふのである。此に於て内なる良心は外なる自然的法則の中に溶解する。自然的法則は「我」を貫いて居る。各個の「我を」を貫いて更らに無限の圓囀を貫いて居る。自分には既に「靈魂不滅」は不可解の疑問ではない。自分此處に大我主義の名を附して居た。道徳を棲守するものは一時は寂莫であるかも知れぬが權勢に阿諛するものは永遠に寂莫なるを思はざるを得ない。自分は神に觸れざるを得なくなつた。赤い花はかすかに窺れる。大正三年一月三十日の日記に次の如く記されてある。

吾人が修養の極致は宇宙の本体に歸一すべき事であることは最早疑ふ餘地がない。……佛教では吾人の身体又は心理上に云ふ諸感覺は現象に外ならぬと云うて居るが正に然り。吾人が肉體感覺の奴隸となるが故に世の中に色々の騷動が起つてくるのである。人死すれば肉體は亡ぶ。故に肉體の感覺から超越し得て涅槃の境に入りて宇宙の本体に歸一する。……是に於て無我の境は來り假象を去りて眞實の有我の境に至る。然し自分に在りては無我よりも一別のものでないであらうが——眞實の有我がより領したるものであつた。涅槃を説く釋迦よりも十字架についた基督は自分にはより共鳴を覺ゆるものであつた。宗教は自分には最早全く無關係のものではない。

こゝに記さねばならぬことは寛博士の「古神道大義」が與へたる大なる共鳴である。自分の以上の思索が上述の如く開展して來たに就ては此著に負ふ處多大である。

二、麓の荊棘に苦しんだ時代。

自分が友の導きによりて生れて始めて教會に足を入れたのは全年の二月八日の聖日であつた。洗禮を受けたのは同じく四月廿六日であつた。この朝立田山上の早天祈禱會の時に聞いた鶯の聲と、自分には始めての花陵會館生活の朝に聞いた鶯の聲とは今も尙追憶の導きとなる。自分が始めて教會に足を入れた時は基督教者になる決心であつた。』

神を信する感情に二様ある。一は受働的禮拜的にして一は自働的自依的である。「我は弱者よ、願はくば」と縋るもの、及「神は我れを救ひ給ふ。我何をか懼れん。」と勇むもの。前者は且て自分の嫌惡した處であつた。然し「神我を救ひ給ふ。」の信仰は理性的思索の不足を補うてくれた。理性的思索と生活との關係を附けてくれた。理性的思索が齎すことの出來ない力を得ることが出來た。實に「視力によりて歩まず信仰によりて歩まん。」と現實に向つて突進した自分には少なからぬ寂寥を覺えて居た。「共に事業を爲すものは基督教者

なり。」と觀じたことは自分が教會に行つた殆んど全部の動機であつた。

次に掲げる演説の原稿はよく此頃の思想を表はして居る。

自分は宗教には慰安の方面と力の方面とがあると思ふ。この世に罪のある以上は慰安は必要である。此世に煩悶するものがある以上は慰安は必要である。天地萬有不可解であるだけ宗教の慰安の方面は特に必要である。……この慰安の一面がないならば宗教は成立せず又何等の價値なきものである。然し私はここに一段論鋒を進めて更に高い見地から宗教の價値を判斷したのであります。吾々は一体何の爲めに生きて居るのであるか考へて見ればならぬ。……自己の幸福を求むるのが自己一生の目的である様になります。……然しさうすると他人も亦自分の幸福を求めようと思つて居るのであるから衝突しやすまいか。……「英雄時勢を作るか、時勢英雄を作るか」と云ふ語があります。私は先づ環境が英雄を生育し而て後英雄は時勢を作るものであると考へます。勿論絶對には言へませんが大部分の眞理を含んで居ります。……そうして見るに其人は幾等生れ乍らの眞實に秀でたのがあつたにしても後世の其人の發展は大部分環境の事情如何によるのです。故に自分の一生と云ふものは環境と連關して居る一生であり人類の一生の空間一時間を形成して居るものが自分であります。方丈記の最初に「行く川の流れば絶えずして然も本の水に非ず。よごみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家もまたかくの如し。……住む人もこれに同じ。處もかはらず人もたはかれど、古へ見し人は二十三人が中に僅に一人二人なり。朝に死し夕に生るるならひ、唯水の泡にぞ似たりけり。知らず生れ死ぬる人何方より來り何方へか去る。……」……そうなるに我々は只自分の幸福のみ計つて居ることば出来ません。水は心なきものでありますが然し乍ら低い方へ流れて止みません。人間は常に幸福のある方へと流れて行きます。吾々は此點を考へればならぬ。水は低きにつく。それは致方なきことである。洞穴低きにあらば其中にも流れ込みませう。止水は腐敗するならひ、腐敗せざるを得ないのであります。然しこの低きにつかんとする流れを思ふ様に導くことの出来るのが人間の特權であります。私は今諸君に望みたいことはこの人類の流れが通るべき眞正なる道を開いて戴きたいことであります。動もすれば洞穴の中に流れ込んで腐敗せんとする人類の爲めに其要求する幸福に至るべき眞正なる路を開いて載きたいことである。……。

吾々はこの人類の通路を開かねばならぬ。このためには鐵もいる。鋤もいる。力が最も必要である。

この力を得る祈禱。この力を得る宗教が今や吾々には必要であります。私は互に早く慰安の宗教より力の宗教に入りたく希望するのであります。

自分の基督教は徹頭徹尾まだ大我主義に外ならぬものであつた。間もなく自分は重患に悩まされて病床に横はる身となつた。日記の中に始めて神秘と云ふことを書いて居る。

神秘と云ふことに就ては吾々は心して考へねばならぬ。耶蘇の聖靈降誕を信じて以て神秘とするが如きである。私は之れを中世記の神秘と名けたい。現代の科學には未だ絶對の價值をもたしめることの出來ぬ方面もあるが、このことは明に科學に認め得ざる處である。現場の科學の未だ及ばざる處がある。其處に吾々は神秘を發見したい。基督者は動もすれば神秘を欲したが。然し私はヘーゲルの所謂劇代の偶像を排斥せねばならぬ。中世記の神秘は既に吾々の神秘を欲求する心を満してはくれぬ。吾々の欲する神秘は科學の手のとどかぬ處にある。

然し今思ふと自分乍ら矛盾に迷つて居たことを知るのである。

自分の退院したのは丁度日獨國交斷絶の夕であつた。病床の身には驚天動地の大亂をさへ夢にも知らなかつたけれども退院する頃には薄々漏れ知つて居た。自分の國は廣島市であるので退院の歸路車の上から臨時に建てられた罐詰製造所の横を通つて自分の國も戦争して居ることを感せずには居られなかつた。思ひは自ら戦争のことに走る。

非戰論と主戰論の彼方

戦争の問題は今後益々研究さるゝに至るであらう。將來の政治家を悩ますものはこの戦争論である。吾人は大に戦ふべきか。或は斷然武裝を解くべきか。これ最も困難にして然も大切なる問題である。

金は神につけるものとして假令何人が金を以て單なるユートピアを説くものなりと云はんも余は斷然非戰論を説きたいのである。否寧ろ列強の武裝解除運動の先驅が爲たいのである。然し乍ら聖天國は自己の周圍にさへ建設することの出來ぬものである程國家對立の世界には一層の困難である。……然るが故にユートピアは余の恐るゝところである。……實に社會と苦闘を戰ふ社會人の唯一の樂は何であらう。實に彼が妻子と共にする夕餉の食卓ではないか。實に彼が若闘尙屈せざる力はこの食卓から生ずるものではないか。洋行者が長き異境の生活を終へて故國の綠の山をはるかに望んだ時彼の胸にわぐる歡喜の情は只決してこの世に稀らしい我國の山水に特別の感興を催はすと云ふのみではない。更に更に心の奥に湧き出たる慰安がある。喜びがある。故郷は人間には懐かしいものである。一家の團樂は之れを大にしては一國の團樂である。國家は如何しても守らねばならぬ。否益々固めに勉めねばならぬ。……然し吾々は常にキリストの弟子であることを忘れたくはないのである。……「左の頬を打たんとするものには右の頬をも打たせよ。」と聖書は記して居る。……

獨逸人が云つたことがある。「國家道德は個人道德を以て批判するを得ず。」……然し個人間の道德が即ち社會の道德ではないか。神の大氣の中に生存する共に個人であり國家である。すべての個人を貫く神の意思の眞理ではないか。この個人を貫く神の意思は即國家の意思である。個人の眞理は國家の眞理ならざるを得ない。……

人生沒我(犠牲的の意にて)を取るものと主義をとるものがある。前者は社會の救済に向ふであらう。後者は自己の幸福の探求に進むのである。……イエスは何れに向はれたか。世の救済であつたことに何人も

異論はない。成程イエスは吾人に神の如く全くなれと云はれて居る。然しそれは世を救ふ爲めに必要であるが爲めである。世の救済がイエスの目的であつたとすれば吾人の最後のものは十字架となる。沒我となる。主義は要するに沒我をして更に偉大ならしむべき中間目的である現代は主義の時代であるが、主義は只沒我の中間目的として始めて堅實なる主義たることが出来る。それと共に沒我の中に包擁せられたる主義が堅實なる主義なりと云ひ得る。……若し云ひ得べくんば沒國家は國家最後の目的にして國家の理想であらう。……然し乍ら沒我に包擁されたる主義が沒我をして更に偉大ならしむるが如く沒國家の中に包擁せられたる、換言すれば常に遠き貴き理想の實行を忘れざる國家の國家發展、國家主張が其國家の行動をしてより高くあらしむるものであらう。

政治家は常に動かすべからざる沒國家の理想、高き清き使命を忘れたがるものである。哲學者は空の星ばかり望んで井戸に陥り易いのである。プラトールが政治家を哲學者に求めたのは政治家を井戸に陥らしめんためではない。天上の聖國を地上に降さんためである。

吾人は常に主戰論と非戰論の彼方にこの動かすべからざる真理の横はれることを考へたい。

基督教に飛び込んだ以來五ヶ月。廿年の温かい歴史を有する花陵會館の生活は炎天の下に照りつけられて乾燒し切つた。自分の心に静かな潤いを興へてくれた。丁度今頃の景色の様に枯れて居た木々に梢から次第に緑の若葉をふき出して來た。Furch hinein und ohne Wanken — Sein Segel sind besetzt. — Du mußt glauben du mußt Wagen, — Denn die Goe leihen kein Pfand, — Nur ein wunder kann dich tragen — In das schoene Wunderland.” このシルムルの一句の詩は自分の愛誦であつた。冷たい理想が認めた初の容姿は驚畏の眼の

開かるゝにつれて益々膨張して來た。「事業」に縁を説明せんとした自分には漸く憧憬の腫が開かるゝ様になつた。宇宙の寶庫の中に秘藏してあつた神様は春夜の朧月の様にかすかに心の眼に映じ來つたがまだ薄衣を被つて居られた。自分はやはり多くの人と共に汎神の經跡をたどつた。

大正三年も残り少くなつた或朝の早朝立田山上の早天祈禱會には友の洗禮の途出を祝ふよりも自らの一轉期を喜んだ。「爾等かく愚なるか乎。靈によりて始まりたるに今肉によりて全ふせらるゝや。」とパウロに叫ばれた自分は恐れ慄かざるを得なかつた。地を叫び乍ら天上を走り廻つて居た自分を回想しては寧ろ失笑を禁じ得なかつた。「然らば情らずして守れ爾曹その日その時を知らざればなり。」恐れ慄いた自分には喜悅が伴はねばならぬ。

三、路を見つけた時代。

龍南生活最終の年は心も共に新しい喜びの中に生れた。所謂「宗教」は既に自分には不必要なるものであつた。只基督の教へのみが自分を固く結びつけた。キリストたるイエスは未だ自分の前に顯はれぬがイエスなる人格に自分は憧憬の眼を向けて居た。自分は既にヨハネの野の叫びを聞いて居た。「今や知識は人生唯一の内容ではない。唯八方に光と理性とを放つ高き支配者たるにとゞまる。」

Evangelical Faith を齎した金森通倫氏は三日の生活を共にした吾々に確に一時期を齎した。ヨハネの叫びを聞いた自分には同先生の來館は神の攝理とより外には思はれない。一夜自分達數名は先生と信仰を論じて談壑朝三時に至つた。鷄鳴を聞いて就床した自分達は確に the Baptism を受けて居た。夜半の祈禱が一番よい

と云はれた先生の言は未だ耳底に残つて居る。

イエスの人格は消散して救主キリストが表はれて來た。神の右に座したるキリストが見へる様になつた。救の御手に抱かれる温い感謝の念は湧然とわいて來た。自分は神の前にいと小さきものとなつた。罪の感念は始めて心胸の清淨をせまつて來る。「女を見て色情を起すものは既に姦淫せるなり。」この種の嚴肅なる教の前には行ひすましたる聖者さへ未だ神の御座の遠きことを思うであらう。然し救ひの御手は温く續いて下る。十字架は深刻なる意識を生む。「吾は弱きものよ。神願はくば。」と云ふ祈禱は自ら心胸にわく。「それ十字架は沈論者には愚かなるもの、吾等救はるゝものには神の能たるなり。」自分には宗教は既に理性の所産でない。思想でもない。自分は現實に觸れた力を感じる。實相への努力が始めて力を生む。パウロの言は沈痛である。

「吾れキリストと共に十字架に釘られたり。既に吾れ生くるに非ず。キリスト吾れにありて生くるなり。

今吾れ肉体にありて生くるは吾れを愛して吾が爲めに己れを捨てしものすなはち神の子を信するに由て生る也。(ガラテア書二の二〇)

「始めに道あり。道は神と共にあり。道は神なり。」との使徒ヨハネの信仰が偲ばれる。然し「愛」は更に偉大なるものゝ如く自分には思はれる。此處まで來た自分の宗教は容易に發展してくる。

キリストは神の子である。科學は彼の前には何等の權威をも認められぬ。奇蹟は總て有意義のものとなる。神の前には科學の批判は不可能である。神は絶大なるものとなる。神の行爲は人間には理解し得ざる處である。

而て神は愈々絶對なるものとなり。人間は益々小さきものとなる。神の攝理は感謝に満ちて居る。然し前途を仰ぎ望むとき神の使命は匹儀なき強き力を生む。總ての偉大なる力は使命のもとに生ずる。然も最も清

められて。絶對の服従が神の前に捧げられる。此處に絶對の自由が生ずる。感謝が生ずる。十字架は感謝となる。弱肉強食の社會の中に——「客」と「敵」とは語根を同じくした野蠻人の子孫たる現代人の吾々は既に敵さへ愛せんとして居る。弱肉強食の科學説は文明人の内心には既に卑しむべき動物性として退けられる。

宗教は既に自分の全生命であり、生活の全部である。「然れど我先に我益となりし所のことは基督によりて損ありと意へり。然のみならず我れわが主基督イエスを識を以て最も益される事とするが故に凡のものを損となす。我かれの爲めに既に此等の凡のものを損せしかど之を糞土の如く意へり。」我々の信仰は吾々の生活にまで徹底して来る。靈によれる洗禮を受けたる吾々の其後の祈りは只管吾々の使命の示されんことであつた。吾々は吾々の進まんと志させる將來に少しにても地につける望みなきやを尋ねた。

經世を志す自分には戦争は常に主要なる問題である。自分の信仰が何邊まで徹底して來たかは次の一支に表はれて居る。

……今世界の大勢を見るに一方にはシオニズムなる運動がありと同時に他方には確に社會連帶の傾向が伺はれる。愛國者はシオニズム運動を握へ來つて帝國主義標榜の有力ある理由とする。然て此シオニズム運動會は決して現代の社會連帶の説と逆行して居るものでない社會連帶は人間文明が生んだ個性發展の結果と交通に關する一般施設が進歩した結果である。即國家の境界の中に閉ぢこもることの出來なくなつた個性發展の結果が齎したる傾向である。然るにシオニズムなる運動も世界の浮浪人たるユダヤ人が他國民の排擠の中にありて充分満足し得ざる個性の擴充が齎したる運動に過ぎない。之れを以て直に國家制度か仲仲ぶものでない云ふ理由とするのは洞察したる觀察ではない。寧ろ却つて個性の擴充が漸く國境を越えつつありと云ふことを暗示して居る様に思はれる。彼等ユダヤ人は個性の満足し得る國家を望んで居る。彼等が昔のユダヤの他に新國家を作らんとすることは寧ろ彼等が個性を其蹂躪されて居る状態より救はんとする苦肉策と見るのが至當であらう。

其蹂躪を恐れて居る個性は今強ひても國境の中に満足せんとする傾向を有して居る。近來吾國の學者がヘツケルとカイケンの辯論を以て宇宙の眞理を探求する學者にあるまじき行爲也として叱責したことは却つて吾國の學者の覺悟を述べて居るものである。幸ひに自分は學者の覺悟の明晰なるを喜ぶのである。

宇宙に歸した吾人の思想には既に國境はない。慘憺たる戰爭の有様を見ながら他方に「他愛」博愛を聞く吾吾基督者は心に泣く。平和運動は當然次で來るべき結果である。……

自分は、國家制度は既に戰爭を豫期して居ることを思ふ。……戰爭は國民の衝突に非ずして何であらう。國家の分立は國民の衝突を豫期せざるゝことが出來ようか。地理上の各所が各一様に天然の恩恵に浴し得るならば衝突を豫期せざるゝことも出來よう。然しそれは事實あらざることである。地方の國民が南進せんとするは當然のことである。小きき國境の中に押し込められたる國民が住民稀薄なる地を求めて移らんとするのは決して防止し得ざる自然の趨勢である。かかる場合昔時の如く到處大陸が発見されずに殘存して居るならば何ぞか仕方があつたであらうが然し今は在らざる事實である。國民が他に向つて移動せんとするさきには先づ先住の民族を撤退せしめねばならぬ。それは即ち國民と國民との衝突。國家の衝突である。

こは最も清き動機からなされる——そこには何等の野心もない戰爭である。かかる動機によつて爲さるる戰は決して國民間の意思の疏通や經濟關係にて防止さるべきものではない。自然的のものであつて當然の勢が導く戰爭であるが故に又最も慘狀を見るべき戰爭がある。この戰爭がこの世からなくなることは只國境が撤除されても封建制度の下に限られて居た人民が一の王化に浴する云ふ様に、世界に國境がなくなつて民族が互に一つの人類にまで融合したる状態に於てのみ期待し得べきものがある。平和運動の效果はこの状態に於てのみ促進せしめることに於て有効であらう。*"The peace which is sought in the spirit of peace."* 平和は、*ソナ*に始めて得らる。……今吾人が皇統連綿たる吾皇室を思ひ祖宗以來の君臣の和に感じては天文の恩恵吾國の上に特に優渥なるを思ふのである。かく思ふ時この平和運動の盟主は我日本でありたいと思ふ。而してこの平和をして永遠に誤らざらしむるものも亦我國民であると思ふのである。然し平和運動を爲さんとするものの最も心懸くべきは此點である平和運動者は遺憾乍ら、然し喜んで恩恵ある國土を離れざるを得ない。

思索に徹底して吾人の思想は最早國境を越えて居る。宇宙を仰いで靜かに思索する時心に往來するものは單

なる世界十九億の個我である。自分の思索は所謂危険にまで徹底して來て居る。然しこの思索に觸れない國民を有する國家が何で立派な國家であらう。宇宙の進化を無視したる國家は最も劣等なるものである。換言すれば一人の野心によりて動く國家は最も劣等なる國家なりとの謂である。宇宙化育の趨勢を忘れたる國家に何等の價值があらう。個人を犠牲にして顧みない國家に何の價值があらう。宇宙の化育の趨勢に棄ることの出来る個我は最も價值あるものである。此價值を無視しては國家の存在は何等の價值がない。正義と人道とは永遠に國家を生かす所以である。

自分の思索が今此處で止つて居るならば自分は今こゝにかく無遠慮に危険とまで思ふ思想を發表することは出来なかつたであらう。然し再び高く翱翔せんとして居た自分を現實に引きもどしてくれたものがある。それは基督による信仰である。此處に一寸——人類の前には「我」を最も安價に投げだした自分に最も徹底した自我の來たことを附記して置く。

然し一夜聖書を開くと次の句が出た。

「イエスこの十二(使徒)を遣はさんとして命じ曰けるは異邦の途に往く勿れ。又サマリア人の邑にも入る勿れ。唯イスラエルの迷へる羊に往け……」(馬太、十の五一六)

キリストはイスラエルに生れたのである。自分は日本に生れたのである。自分はたまらなくなつて吾々の祈りの山である立田山に登つた。時は冬月がものすごく明かなる夜であつた。自分は山上に跪いて神を求めた。あたりは靜である。下界の叫び聲が手に取る如く聞ゆる。然し自分は何となく寂寥を感じる。孤獨の淋しさを感ずる。孤獨と寂寥とが祈禱の状態を妨げる。淋しさはひし／＼とせまる。小笹吹く風の音が齋す音信は

孤獨の悲哀であつた。自分には未だ十字架は重かつたのである。

今自分からキリストを奪ふならば自分の生命は無くなるであらう。今自分は神の小羊である。然し最近次の如く記して居る。

Quo Vadis を見た人は承知であらう。主の御聲によつて十字架に釘けられにローマへ歸つて行つたペテロ。死の前に尙讚美を捧げてをる殉教者。あれ程この世に強い者はないであらう。更に敵を愛すること。これ程この世に强者の道徳はないであらう。基督者は此世に最も強い者である。

“Thy way, not mine, O Lord!” と叫ぶ神の小羊はこの世に最も強いものである。

自分の前には只眞直に立派な道が赤い花にまで上つて居る。

三年間常に思想に建設的に徹底を求めて止まなかつた自分は幸福であつた。然し自分には思想は既に將來のものでない。只赤い花を取りに狭い坂路を上つて行く努力残されてある。眞在の運動に參與しつゝありその自信よりも、眞在の運動に自分を結びつける偉大なる力が——然も温かき愛の恵みを以て自分の上に下る。自分の宗教は神聖なる——贖罪の血によりて結ばれたる——戀愛である。

(四月十八日於花園會館)